

〔景観向上に向けた屋上・壁面緑化技術の開発〕  
 数種の屋上緑化用培養土と高性ビンカの生育

田旗裕也・佐藤澄仁\*

(江戸川分場・\*園芸部)

【目的】

屋上緑化用に開発された数種の人工培養土について、江戸川分場本館屋上に設置した試験花壇における花苗活着状況と、その後の生育に及ぼす影響を明らかにする。

【試験方法】

江戸川分場本館屋上（3階部分、地上高7.6m）に2001年4月1日に設置完了した縦1.2m×横1.2m×20cmの試験花壇を使用した。用土は、屋上緑化用の市販人工培養土6種‘アクアソイル、ピバソイル、アルファベース、デュオライト、ケイソイル、ガーデンロード’ならびに、場内で配合した‘ピートモス：パーライト=7:3(v/v)配合土、赤土：ピートモス：パーライト=5:3:2、赤土：ピートモス=7:3、赤土単用’の計10種類を供試した。なお‘ピートモス：パーライト=7:3配合土’については、土層厚の影響を検討するため、厚さ20cmと30cmの2区を使用した。高性ビンカ品種‘トコナツパープル、トコナツレッド（株ミヨシ）’を供試し、7.5cmポット苗を各区に0.2×0.2m間隔で定植した。なお前作は、01年4月10日から1年間ハナツルソウ（*Aptenia cordifolia* (L.f) Schwantes）を栽培した。最終施肥は01年11月に緩効性ロング肥料360タイプを使用し、ビンカ定植時には基肥無施用とした。灌水は1日2回タイマー制御による点滴式を使用し、高温乾燥時にはホースによる手灌水を行った。

【成果の概要】

1) 市販人工培養土の比較：定植時を基準にした定植後20日間の草丈増加量は、‘ピートモス：パーライト=7:3配合土 厚さ20cm’区を対照に比較すると、‘デュオライト’と‘ケイソイル’で劣る傾向があった。他の人工培養土は対照区と差がなかった。11月最終調査時の草丈も、‘デュオライト、ケイソイル’で小さく、節数も少ない傾向があった。

2) 赤土ベース培養土の比較：定植後20日間の草丈増加量は、‘ピートモス：パーライト=7:3配合土 厚さ20cm’に比べ、‘赤土：ピートモス=7:3’と‘赤土：ピートモス：パーライト=5:3:2’で優れた。11月までの草丈・株張・節数は、‘赤土単用’区を含む各区間でほぼ等しかった。

3) 土層厚の影響：‘ピートモス：パーライト=7:3配合土’について、土層厚30cm区は20cm区に比べ、定植後の草丈増加量劣る傾向があった。しかし11月の生育は、両区間に優位な差はなかった（以上、図1、図2）。

4) 以上の結果、各人工培養土とも屋上緑化に使用できるが、旺盛な生育を期待する場合は‘ピバソイル、アルファベース’の2種が適した。‘デュオライト’‘ケイソイル’は、生育を抑制する傾向があるため、草姿・草勢を維持して長期間の観賞を期待する場合に適するが、定植時の活着に注意を要する。土層厚が生育に及ぼす影響は小さいと考えられたが、建築物への加重軽減の目的から、より薄い土層での検討が必要である。

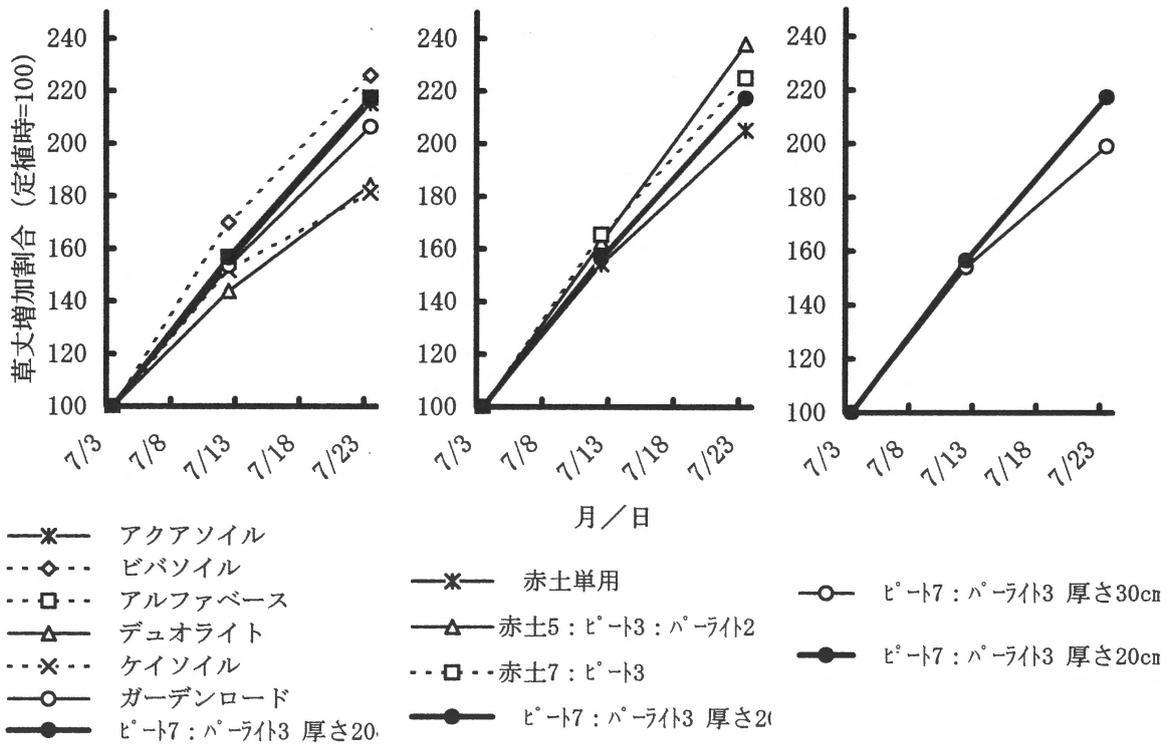


図1 定植後20日間のビンカ草丈増加量に及ぼす、屋上緑化用培養土の影響  
 調査場所：都農試江戸川分場屋上，供試品種：‘トコナツパープル，トコナツレッド’，定植日：02年7月3日

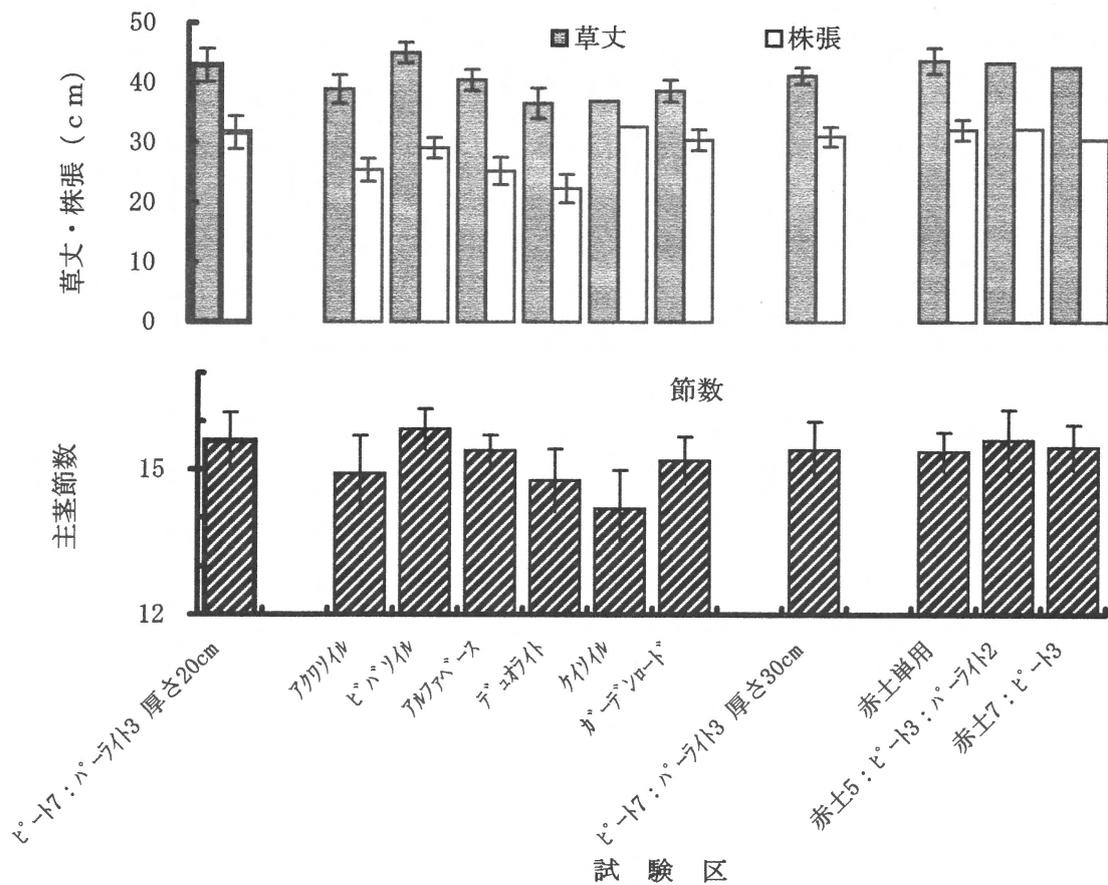


図2 開花終了時のビンカ生育状況 (02年11月5日調査)